

随 想

いまどきの高校生 —教育実習の体験から—

村吉 美架

去る6月、地元沖縄の県立高校で教育実習を行った。当校は、理数科、英語科、芸術科の3コースから成っており、芸術科はさらに音楽コースと美術コースに分かれている。私の出身コースであり今回の実習で担当することになった理数科は、「科学技術、理科・数学教育を重点的に行う学校」として文部科学省からSSH（Super Science High school）の指定を受け、課題研究に力を入れている。校舎は丘陵の上に立地しており、周囲は霊園とごみ収集場、林、民家ばかりで、決して便利な場所とはいえないのだが、見方を変えたと、油を売る所が皆無で学ぶ環境は整っていると言えるだろう。

当校の生徒は、ほぼ全員が大学への進学を希望しており、熱心な教師たちの指導のもと日々ハードなスケジュールをこなしている。平日は0校時から7校時まで授業があり、放課後や休日にも模擬テストや講座が入っていることが多い。ゆとり教育の導入は現在の高校1年生からで、カリキュラムにはさほど変化はなかったが、私の頃よりも小テストが減り、週に1日だけ朝のショートホームルームと職員朝礼を削って授業の始まる時間を早めることで放課後の時間を増やしており、幾分緩やかになっていた。それでもやはりハードであることには変わらない。当時の私は当たり前のようにこのハードスケジュールをこなしていたのだが、自分のペースで勝手に動ける大学生活に慣れてしまった今となっては考えられない生活である。

教師の立場からみると、朝早くから学校へ来て授業をしたり休日にも出勤したり、テストを作ったりと、他の県立校に比べるとかなりきついだろう。しかしながら、生徒指導ということになるとかなり楽な方だと思われる。病欠・公欠以外の欠席者は無く、授業をサボる生徒もおらず、掃除等の活動も自主的に役割分担をして能率的に行う習慣が身につけているため、基本的な生活態度に関してはほとんど指導の必要がないのだ。

このように、学業面でも生活面でも少々特殊な高校なのだが、そこで体験し

て感じたことをいくつか綴ってみようと思う。

まず、第一印象で驚いたのは、生徒の外見が全体的に派手になったことである。私が高校生の際は、自分の容姿に関して無頓着で特に手を加えることもなく、周りの友人もわりと素朴な感じであったのだが、今では茶髪やピアス穴を空けている生徒はさほど珍しくはない。服装に関しても、制服のシャツをズボンの外に出したり、ズボンを腰の位置で穿いたり、スカートを短くしたりと、皆思い思いの着方をしていた。正直なところ、生徒の質が下がってしまったと思わずにはいられなかった。なかでも特に目立つ生徒が数名いたので注意して見ていると、案の定、後方の席で授業中であるにもかかわらずぺちゃくちゃお喋りを始めるではないか。その時私は教室の一番後ろで授業参観をしていたので、講義をしている先生に代わって彼らをたしなめようと思った。しかし、会話をよく聞いてみると、雑談をしている訳ではなく、演習問題に関して一方が質問をし、もう一方が説明しているだけだったのだ。私は、人を見ただけで判断してしまった自分の未熟さを恥じた。制服を着崩していようが、どこに穴を開けていようが、その他の生活態度や勉強の取り組み方に影響はない。TPOをわきまえ、人に誤解されないような身だしなみを指導する余地はありそうだが、表面的なものにそれほど神経質になる必要はなさそうである。

次に、私が興味を持ったのは、各コース（理数・英語・芸術）に所属する生徒の特徴の相違である。私の担当教科は物理で、2年生の理数科を2クラス受け持つことになったのだが、機会があつて全てのコースに関わることができた。それぞれに接してみた結果、2つの相違点に気がついた。

1つ目は、実習生に慣れ親しむ早さの相違である。芸術科は慣れるのが最も早かった。初顔合わせのため教室に入った瞬間からどよめきが起こり、私が自己紹介するや否や様々な質問を投げかけてくれ、さらに自主的に自分達の自己紹介までしてくれたのだ。英語科は、芸術科ほど早くはなかったが、授業後に何人かやってきて話しかけてくれ、廊下ですれ違う際にもよく声をかけてくれた。しかし、理数科は全く様子が異なっていた。顔を合わせる機会が最も多いにもかかわらず、打ち解けるまでに要した時間は最長であった。

実習初日の朝、私は担任の先生の後についてホームルーム担当の理数科クラスへ挨拶に行った。教室の中は異様に静かで、冷たい空気が張り詰めていた。多くの生徒が顔を上げて私の方に視線を向けてくれてはいるが、その表情は硬

く、非常に冷めきった印象を受けたのを覚えている。その後も、実習生に対して無関心な態度が続いた。あまりの冷めた態度にショックを受け、理数科と顔を合わせるのが苦痛になるほどであった。1週間が経過した頃、よりもよって研究授業を行う予定の理数科クラスだけが気まずい雰囲気のままだったので、このままの状態が続くのはさすがにまずいと考えた。そこで、煙たがられるのを覚悟でこちらから話しかけていき、学祭の準備を手伝わせてもらうなどして、とにかくできる限り関わろうとした。連日の睡眠不足でもはや体力は限界だったので、少しでも生徒と仲良くなり、気力だけでも奮い立たせ、実習を楽しいものにしたかったのだ。そんな想いが通じたのか、徐々に笑顔を見せてくれるようになり、実習終盤になってようやくぎこちなさが感じられなくなった。結局、最終的に最も仲良くなれたのはこの理数科クラスだったのだが、他の科の何倍も時間を要した。他の学年を持つ実習生の体験を聞いてみたところ、やはり同様の傾向がうかがえた。

もう1つ相違点は、授業形態の好みである。芸術科は演習よりも講義の方を好み、理数科は講義よりも演習を好む傾向にある。今思い返してみると、私の時代もそうであった。理数科クラスは自学自習で授業よりも先の内容に進んでいる生徒もおり、講義中は静かに聞いている人と自分で教科書を進めている人が半々くらいであった。英語科のことはよく知らないのだが、芸術科は理数科に比べて授業中も賑やかだったのを覚えている。当校の生徒の一般的傾向として、芸術科は人との対話から学ぶことを好み、理数科は人から教えてもらうよりも自分で学ぶ方が性に合っているようだ。教育者たる者は、生徒たちの特徴をよく理解し、それぞれに効果的な授業を展開せねばならない。

それぞれの科に共通して最も興味を示してくれた授業形態は、一斉実験である。普段は授業進度に対する配慮から演習実験が主なので、実習生の特権を利用して私が頻繁に行った、見るだけでなく実際に体験できる一斉実験は、かなり好評であった。できるだけ短い時間内に収めるように、予備実験をしたり全員分の実験装置をある程度組み立てて置いたりなど、準備には時間がかかるのだが、その分教育的効果は大きい。現代っ子は、外で遊ぶという経験があまりない。テレビ鑑賞やテレビゲームなどの電子遊戯が主体で、実際にモノに触れて体験する機会が少ないように思える。そんな時代だからこそ、理科実験の重要性が増してくるのではないだろうか。

実習の間、生徒達から多くのことを学ばせてもらったが、非常に感心させられたことは、生徒達の時間の使い方である。ちょうど実習期間直後に学園祭を控えていたのだが、生徒達は相変わらず勉強に追われていた。しかし、どんな行事があろうとも準備のために授業を削らないのがこの学校の伝統である。私の頃よりは多少配慮がなされていて7校時の授業が何度かカットになったが、それでも殆ど通常と変わりはない。休日に作業しようと思っても、土、日さえもテストや講座があって十分な時間がとれない。当校に新しく赴任してきた先生方は、学祭の準備時間が少なすぎることに驚き、まともな学祭などできやしないと考えるのが常である。しかし実際はいつも、驚くほど盛大なものに仕上がるのだ。当校の生徒達は、毎日のように授業の予習やテストに追われていて時間の大切さが分かるだけに、有効な時間の使い方を知っている。時間というものは、ただ存分にあれば良いというものではない。限られた時間だからこそ有意義に使おうという気力が沸いてくるのではないか。ゆったりと流れる時間もそれなりに良いものだが、限られた時間を懸命に使って何かを為せば非常に充実した気持ちになれる。そのような時間の使い方を、勉強や芸術、遊びなどあらゆる方面において活用できる生徒たちの姿を見て感銘を受けた。

今回の実習体験から言えることは、いまどきの高校生も捨てたものではない、ということである。連日のように報道される少年犯罪や現代の若者に対する不平不満を聞いていると、全ての若者が良くないような錯覚に陥ってしまい、初めは高校へ教育実習に行くのが不安で仕方なかったのだが、実際に行ってみると良い方に裏切られる結果になった。皆が携帯電話を持っていたり、服装が自分の頃と変化していたりなど、卒業してからまだ5年近くしか経っていないにもかかわらず時代の流れを感じることもあったが、根っこのところは変わっていないように思う。授業をサボることもなく、授業中に携帯をいじることもなかったところをみると、むしろ今の大学生の方がマナーが悪い。これから世に羽ばたく後輩たちに大いに期待すると同時に、未来の担い手となる子供たちの人格や知識の土台の形成に関わる教師という職業に、やりがいと責任を実感できた2週間であった。

(名古屋大学情報文化学部学生)